

イエスのことば 第36回

イエスは言われた。「わたしがいのちのパンです。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません。

(ヨハネ 6 : 35)

□イエスの公生涯の起承転結

起：受洗から、メシア宣言（紀元 27 年の春、過越の祭り）を経て、宣教開始まで

承：メシアとしての権威を現わす。しかし結果的に、指導者層の拒否を受ける

転：弟子訓練

結：エルサレム入城から十字架（紀元 30 年の春、過越の祭り）、復活、昇天

□文脈の確認

1. 転の部、弟子訓練。十字架まで、1 年余。
2. 紀元 29 年の春、過越の祭りの頃から、同年の秋、仮庵の祭りまでの、約 6 か月間において、イエスは、異邦人の地域へ 4 回、旅行した。異邦人地域への 4 回の旅行は、退避と休息の時であったと同時に、弟子たちの訓練を目的とした。
3. 異邦人地域への旅行第 1 回：ガリラヤ地方を離れて、別の領主ヘロデ・ピリポ II 世の領域（ガリラヤ湖の北東地域、ユダヤ人の人口は少数）の町ベツサイダの近くへ。
 - (1) ガリラヤ地方の群衆は、イエスと弟子たちが舟に乗ってベツサイダの方へ移動したのを見て、陸路、先回りして、イエスの一行のもとに来た。
 - (2) イエスは、群衆に（奥義としての）神の国について（たとえ話で）教え、（イエスをメシアとして信じる者たちで癒やしを求めたきた人たちの）病をいやした。
 - (3) 夕方になり、空腹になっている群衆に、イエスは給食の奇跡を行った。「五千人の給食」と呼ばれる奇跡の出来事であった。
4. 「五千人の給食」を通して何を弟子たちは訓練されたのか。次の 2 点であった。
 - (1) 群衆に食べ物を自分たちで与える必要が生じることがあり得ること。しかし、自分たちにはその力はない。必要なものは、イエスが与えてくださる。しかも、イエスが与えてくださるときには、思いもなかったものを用いてくださる。弟子たちの役割は、イエスが与えてくださるものを受け取り、配分すること。そのためには、前もって群衆を組にして座らせておくこと（秩序）。
 - (2) ここでのレッスンは、パンや魚の食べ物を与えることであったが、この教えは、霊的な食べ物を与えるという弟子たちの本来の使命につながる。
 ヨハネ 6 : 27 なくなってしまう食べ物のためではなく、いつまでもなくならない、永遠のいのちに至る食べ物のために働きなさい。それは、人の子が与える食べ物です。

5. 前回は、「五千人の給食」の奇跡の直後に起きた出来事であった。給食を受けた群衆（ガリラヤ地方のユダヤ人たち）がイエスを王に擁立しようとするが、イエスはその動きを拒み、弟子たちだけを舟に乗せて出発させた後、湖上の嵐の中で起きた出来事であった。嵐の中で受けた訓練により、弟子たちはイエスの神性を認めた。
メシアは、**神であり人である、お方**である。 **God - Man**
6. 今回は、嵐の中での訓練を終え、ガリラヤ湖の北西岸、ユダヤ人の地域に戻ったときの出来事、そしてカペナウムに戻ってきたときの出来事である。

□ゲネサレの地（ガリラヤ湖の北西岸の地域）に到着。群衆がイエスのもとに来る

項目	マタイ	マルコ	ルカ	ヨハネ
1. 舟がゲネサレの地に到着。	14 : 34	6 : 53		
2. 群衆（その地域のユダヤ人）がイエスのもとに来た。	14 : 35	6 : 54~55		
3. イエスの衣の房にさわった人たちがみな癒やされた。	14 : 36	6 : 56		

□カペナウムの会堂にて、**いのちのパン**についての教え

項目	マタイ	マルコ	ルカ	ヨハネ
1. 「五千人の給食」を受けたユダヤ人の群衆が、イエスを捜して、舟にてカペナウムに向かった。				6 : 22~24
2. イエスが、ちょうど、ゲネサレの地からカペナウムに戻ってきて、会堂に立った。イエスは、追いかけてきた人々の本当の動機を指摘した。				(6 : 59) 6 : 25~27
3. 群衆の問い：永遠のいのちに至る食べ物のために働くとは？ そのためには何をすべきか？				6 : 28~29

4. 群衆の要求： 神がイエスを遣わしたことを示すしるしを見せろ				6：30～40
5. 群衆の文句：あれはヨセフの子ではないか				6：41～43
6. イエスの教え				6：44～59
7. 弟子たちの多くが離れた				6：60～66
8. 十二人の弟子（使徒）たち				6：67～71

1. 項目1番、ヨハネ6：22 「その翌日」とは、五千人の給食を受けた日の翌日である。群衆は一晚を、ベツサイダの町の郊外で過ごしたわけであるが、その夜の間には、何が起きていたか？（参照 ヨハネ6：16～21） 群衆は、そのことを知っていたか？（参照 ヨハネ6：15、マルコ6：46～48）
2. 項目2番、ヨハネ6：26 「しるしを見た」とは、イエスが承の部でずっと見せてきたしるし、すなわちイエスがメシアであることを示す明確な奇跡の数々である。「パンを食べて満腹した」とは、「五千人の給食」での出来事を指す。6：27でイエスが言われたことば「働きなさい」という命令は、群衆のどのような願望を戒めているだろうか？
3. 項目2番、ヨハネ6：27 イエスが「永遠のいのちに至る食べ物のために働きなさい」と言ったときに、群衆は二つの誤解をした。一つは、「永遠のいのちに至る食べ物」とは、霊的な食べ物であるとは全く気づかないで、あくまで口で食べて体に摂取する食べ物だと思っていること。二つ目は、「働きなさい」と言われて、イエスの真意を理解せず、「何をすればよいのか」と疑問に感じたことである。その疑問が、28節「神のわざを行うためには、何をすべきでしょうか」という問いになる。このとき、群衆の頭の中では、「神のわざを行う」とは、具体的にどういうことを想像しているだろうか？
4. 項目4番、ヨハネ6：30 群衆はイエスにしるしを求めた。この求めはイエスにとって受け入れられるのか？ イエスがメシアであることを証明するしるしは、この時点では、どのようなしるししか与えられないことになっていたか？

5. 項目4番、ヨハネ6:31 群衆は、出エジプトの荒野での「マナ」を引き合いに出した。これは、当時のユダヤ教ラビたちの教えの中で、【メシアが来たら、モーセの再来として、天からマナを与えてくださる】と言い伝えられていたためである。そこで、イエスは、32節「モーセがあなたがたに天からのパンを与えたのではありません」と、ユダヤ人たちの認識を正した。モーセは神のしもべであって、先祖たちに荒野でマナを与えてくださったのは、父なる神である。そして、イエスは、マナよりもすぐれたものを示す。32節「わたしの父が、あなたがたに天からのまことのパンを与えてくださるのです。神のパンは、天から下って来て、世にいのちを与えるものなのです。」
6. ここまで言われても、群衆は、「天からのまことのパン」が霊的な食べ物であることに気づかない。項目4番、ヨハネ6:34、彼らはイエスに言った。「主よ。そのパンをいつも私たちにお与えください。」この要求は、口で食べて体に摂取するパンを想定している。なぜ、ここまで群衆はわからないのか？ 別の見方をすれば、なぜイエスは、群衆がわからないように語るのか？（ヒント メシア拒否のあと、教え方の変化）
7. 項目6番、ヨハネ6:51 「わたしが与えるパンは、世のいのちのため、わたしの肉です」このイエスのことばは、たとえ話である。しかし、このパンを『口で食べて体に摂取するパン』としか理解していない群衆には、疑問がわきあがる。52節「どうやって自分の肉を私たちと与えて食べさせることができるのか」。追い打ちをかけるように、イエスは彼らに言われた。53節、「人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはありません」。実際に血を飲むことは、創9:4とレビ7:27により禁止されているが、そもそも血といのちとはどう関係するか？（参照 レビ17:11）
8. 項目7番、ヨハネ6:60 イエスのたとえ話を聞いて理解できなかったのは、群衆だけではない。弟子たちも同じである。弟子たちのうちの多くの者がイエスの話について小声で文句を言っていた。ここから弟子たちへの教えとなる。イエスが話してきた「パン」が、口にを入れる食べ物としてのパンではなく、霊的な食べ物であることが、弟子たちに語られる。63節 「いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。わたしがあなたがたに話してきたことばは、霊であり、またいのちです。」ここでイエスは、何がいのちであると、教えたか？ そして「いのちのパン」とは何か？
9. 項目7番、ヨハネ6:66 弟子たちの多くの者が離れ去った。弟子たちであっても、たとえ話だけでは理解できなかった。イエスから解説を教えてもらわねばならない。しかし、それを聞いてもわからずに、離れ去った弟子たちが多くいた。その弟子たちは、信仰があったのか、それとも、なかったのか？（参照 6:36~40、64）